

Title	奈良朝貴族の生活圏：続日本紀にみえる地名の分布からみた考察
Sub Title	The Sphere of Aristocratic life in the "Nara" Period
Author	井口, 悦男(Iguchi, Etsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.1/2 (1970. 5) ,p.121- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	今宮新先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700500-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奈良朝貴族の生活圏

——続日本紀にみえる地名の分布からみた考察——

はじめに

わたくしは先に、古事記、日本書紀のなかにでてくる地名に注目し、その国別分布を調べることによって、奈良朝前期（七世紀末—八世紀初）の古代貴族の生活圏についての想定を試みてみた。そこでわたくしは、都をとりまく特別行政区域とみられる畿内とほぼ同じ範囲の地域が、支配者であった貴族たちの日常の行動圏であり、彼等の生活舞台の範囲と考えられるとした。南九州から東北南部にわたる範囲を中央集権的に支配した古代国家は、地方に至るまで中央出身の貴族の役人による支配がよくゆきわたっていたとみられる。しかし、貴族が役人として活躍した地域は当時の全国に及んでいたとしても、残された国家的史料の示すところでは、彼等の日常の生活舞台は都に近い国々およびその周辺という限られた地域内であったことを、地名分布の状況が物語っているのである。この日本を支配していた貴族たちは、畿内地域を生活圏とする人たちであったとみられる。と同時に、当時畿内という区画が設けられていた理由のひとつとして、貴族の大事な生活圏にもとづく点も考慮されねばならないと強調したところであった。⁽¹⁾

わたくしはその後、記紀につづく史料である続日本紀について、記紀で行ったと同様の地名分布の調査を進めてきた。そして、出てきた国別地名分布の数値を目安として、記紀ですでに得た結果と比較しながら、続紀の地名分布上の特色についていろいろ考えてみた。この考察を通じてその後の貴族の生活圏について、言いかえれば奈良朝時代、八世紀後半ごろの彼等の生活舞台の範囲について考えを進めてみた。

註

(1) 井口「記紀にみえる地名の分布からみた古代貴族の生活圏について」(史学36)2・3合併号

(2) 続日本紀四十巻は、文武天皇元年から桓武天皇の延暦十年(六九七—七九一)に至る約百年間の記録であり、延暦十三年(七九四)後半の二十巻が、同十六年(七九七)に前半の二十巻が完成したといわれる。成立に至るまでの複雑な事情はいまおくとして、ここに示された年代は、八世紀のほとんど全体にわたる。いわゆる奈良時代から平安初期の歴史の根本史料であ

る。ただ記紀の場合について前稿にのべたように、記が和銅五年(七一三)、紀が養老四年(七二〇)にそれぞれ成立したと考えられるが、そこに示された歴史がいかにかに古いことについてのべてあっても、歴史意識としてみる場合編集時の意識が一番強く反映しているものと思われ、天武・持統朝以降の年代感覚の透視を受けているものとして、記紀の示す年代を七世紀後半から八世紀はじめとみた。続紀について同様に考えると、八世紀全体のことをのべているが、編集時に近い八世紀後半の視点によるところが多いとみられる。

古代貴族の生活圏を想定するにあたって、史料上の手掛りになるとした地名について、まずそのとりあげかたの原則をのべることからはじめよう。

地名としてとりあげたのは続紀に、たとえば(以下史料の傍点は筆者による……は中略)

- (1) 三月辛巳朔 行幸甕原離宮(天平八年)
- (2) 五月甲午 備前國獻神馬(慶雲元年)

のような、明らかに土地の名称にあたるものに限らず、さらに広くたとえば、

- (3) 四年春正月癸亥朔 御大極殿受朝……是日宴 五位已上於内裏……甲子 幸太保第(天平宝字四年)
- (4) 夏四月癸巳 東院玉殿新成 群臣畢會其殿……時人謂之玉宮(神護景雲元年)
- (5) 秋七月癸酉 天皇御大藏省覽相撲(天平十年)
- (6) (六月) 丁亥 奉黑毛馬於丹生川上神 旱也(宝龜六年)
- (7) (三月) 戊申 叙越前國丹生郡雨夜神從五位下(宝龜五年)
- (8) (七月) 甲辰 震西大寺西塔(宝龜七年)
- (9) (正月) 壬子 於近江國滋賀郡始造梵釋寺矣(延暦五年)
- (10) 八月癸丑 奉爲太上天皇造寫釋迦像并法華經訖 仍於藥師寺設齋焉(神龜三年)

などの例が、いろいろあげられてくるが、宮殿、官庁、邸宅、神社、寺院などの名称も、それぞれ貴族の活躍した場所として、一般にいう地名と同じものと考え、とりあげていくことにした。

このような地名、場所の表示をとりあげて、その分布を調べるにあたって、その数えあげかたの原則はつぎのようにした。索引を利用して機械的に地名を拾いあげ数えるという方法が比較的簡単に行える方法であるが、しかしこの方法をとる場合、まず重複して件数を数えるおそれが多分にある。たとえば(9)の場合、索引では近江国の項と、滋賀郡の項と、梵釈寺の項と、三カ所にわたって同一の記事について示しているはずであり、直接原文にあたってこれを調整しないかぎり、(9)の記事から近江国の地名件数として1のはずのものを3と数えてしまうおそれがある。そこで続紀の場合も前に記紀で実行したと同様に、史料を最初から順に目を通し、ひとつひとつの記事にあたって、地名表示のあるものを拾いだし、その記事の内容や地名表記の仕方など十分考慮したうえで、ここでひとつあそこでひとつという工合に慎重に数える

という方法をとることにした。いま数えかたの具体例を簡単なもので示せば(3)の場合、天皇が大極殿に出御され元旦の賀儀がおこなわれた。これが宮中での1件であり、続いて内裏で上位の貴族たちに宴を賜った。これも宮中の1件である。翌二日、天皇が都の押勝邸に行幸された。これは京師内の1件というように数える。さきほどの(9)の場合は、梵釈寺の造営として近江国内の1件と数え、(4)では、「東院玉殿」と「玉宮」との二つの地名表示がみられるが、同一宮殿を指しており、言うまでもなくこの記事からは宮中の1件と数えるのである。

なお、場所の表示が史料上含まれていない場合、たとえば

(11) 三月甲辰 宴五位已上 令文人上曲水之詩 賜祿有差(宝龜十年)

(12) (八月) 始設蓮葉之宴(宝龜六年)

のようなきには、たとえその場所が予測できても、原則としてこれらの記事は件数に数えないこととした。宮中、京師内での事実をのべていると思われるこの種の記事は続紀に比較的多くみられるが、ここでは除外した。また外国の地名についてはここでは計算に入れていない。一方、地名の表示が明らかなる場合でも、たとえば国司など地方官の任命の記事はここでは対象外とした。⁽⁴⁾

こうしてとり出してきた地名を国別単位にまとめて全国の分布をとってみたのである。わたくしはこのような地名分布を求めることによって、続紀が史料として含んでいる地域的な特性を、明らかにすることができると思うのである。地名分布の数値を中心にして続紀の持つ地域性を明らかにすることは、続紀の特色のひとつを示したことであり、それなりに一応の成果を得たと思うが、わたくしはそこからさらに進んで、この数値をもとにして当時の貴族の生活圏について考えてみたいと思うのである。

このように考えるのは、続紀にのせられた地名を含む非常に多くの記事のなかから、どの場所、どの地域での事実がよ

り多く記録されているかを把握できれば、続紀をつくりあげ日本全体を支配していた貴族たちが、日本のなかでどの地域により大きな注目、関心を寄せていたか、その傾向を知ることができると思うからである。続紀には、日本のあちこちに起り報告されていた国家として注目すべきかすかずの事実の記録のなかから、正史にのせるにふさわしいと考えられたものが選択されて記録されたに違いない。正史は当時考えられた国家的行為の集積記録であるが、そのなかに古代国家を運営した階級としての貴族の主張が第一に示されていることは、今日から眺めるとき疑えない事実であろう。当時の貴族の立場が律令国家に密着し、国家の手足である役人として活躍することにあつたことを思えば、この公的記録は貴族たちの公的な日常行動が中心になっているものと考えて差支えなからう。とすれば、正史から当時の貴族の日常の行動圏、いかえれば彼等の生活圏を、続紀の記事に示された地名を指標としてその分布状況をみれば、間接的ではあるが予想することが可能といえよう。

以上のような意味を持つと考えられる地名であるが、さらにその表記の仕方に注意してみると、この項のはじめに例示したいくつかの地名例からも言えることであるが、たとえば(7)(9)では「越前國丹生郡雨夜神」「近江國滋賀郡……梵釋寺」とあるように、国、郡をあげてその場所を示す、いかえれば註記つきで地名を示す表示の方法と、(1)(6)(8)(10)の場合のように註記なしで「甕原離宮」「丹生川上神」「西大寺西塔」「薬師寺」などと、いきなりその場所を記す表示の方法とのふたつがあることに気付くのである。問題にしたいのは後者の註記なしの表記法についてである。この表記法は、記事の前後関係や文章上の都合での省略による場合も考えられないではないが、史料上広い範囲にわたり同様の表記法でくりかえされている場合は、むしろたまたま註記が省略されたと考えるより、その表記がその地名に対する慣用句であつたと考えるほうが自然であろう。⁽⁵⁾ではなぜこのような註記なしの地名表記があるのだろうか。わたくしはつぎのように考えている。(8)(10)の場合でいえば「西大寺」「薬師寺」など都のなかで名の通つた場所については、その上にわざわざ「京の」

という風な国郡に相当する註記をつけなくても、貴族たちには十分通ずる場所であったことによる点が考えられないかということである。(3)(4)(5)にあげた宮中の場所については何ら註記のないことを考え合せると、この点がさらにはっきりしてくるといえよう。そのうえここに

(13) (十月) 甲子 充石上神封五十戸 能登國氣多神廿戸田二町 (神護景雲二年)

(14) (十二月) 丁巳 大和國平群郡久度神 叙從五位下爲官社 (延暦二年)

のような例があげられてくる。(13)はふたつの表記法がひとつの記事のなかに出てくる例である。「石上神」には別に位置を示す註記がないのに対して「氣多神」には「能登國」という註記がついている。この表記法上の差をわたくしはつぎのように考える。石上神はそれ自体だけの表記で「大和國」というような註記をつけなくても、祭られている場所や神威もよく知られている神であるのに対し、氣多神は少くとも「氣多神」という表記だけではそれらのことが貴族たちにすぐ通じるほど知られた神ではなかったこととの差を示していると思うのである。(14)の例のあることによって、石上神が都に近い大和国内に祭られる神であったので「大和國」を省略したのではないこともわかってくると思う。久度神は石上神ほど貴族に知られた神ではなかったので「大和國平群郡」に祭られる「久度神」というような註記が必要であったとみられる。単に「久度神」と記すだけでは人々にどの神のことであるか、それほどまだはつきりしない存在であったといえよう。

以上の考えが認められるとすれば、国や郡など場所に関する註記のない地名の表示は、正史として省略したかたちの地名表記法であると同時に、一方では編集者の意識しないものであったと思うが、今日から眺めると貴族たちにとって親しい地名というか、身近かな地名に対する表記であったことを物語っていると考えられてくるのである。このように考えられる註記のない地名を、以下わたくしは略称と呼ばしていただくが、略称地名の分布を調べることによってもまた、貴族の生活圏を知ろうとするのに、重要な手掛りが得られるといえよう。この意味で略称という地名表記は注目に価するといわ

たくしは思うのである。

註

(3) たとえば 続日本紀索引(六国史索引 二)

なお熊谷幸次郎編 続日本紀索引 は原文の一部が簡単に併記されていて便利である。

(4) 国司など地方官名には地名が含まれているが、これは官職名であり、彼等がしかるべき場所での活躍を示す場合は別であるが、単にその官職に任せられたとする叙任の場合は、その地名での活躍を叙任自体がただちに示すとは考えず除外した。

(5) 「薬師寺」とか「東大寺」などでのことをのべる場合、続紀が常に註記のない略称で記しているのはもちろんである。都を大分離れた大和吉野郡の山奥に祭られる「丹生川上神」の場合の表記法で注意してみると、この神の名は続紀に16カ所(天平宝字7・5庚午から延暦10・6乙卯まで)ほどみられるが、一カ所で大和国丹生川上神とあるだけで、ほかは全部註記なしの表記でくり返されている。また豊前の「八幡神」の場合でいえば、およそ20カ所(天平12・10戊午から宝龜3・4丁巳まで)その名がみえるが、都からはるか遠方の神であるにもかかわらず、どの場合でも豊前国とも宇佐郡とも註記がなく、単に八幡神と記すばかりである。このような表記法をくり返している裏には、編集時の貴族の知識として、八幡神といえは豊前宇佐の八幡神を意味し、丹生川上神といえは、それですぐ吉野の山奥に祭る神と通ずる、いずれも前提があったと思われ、慣用

奈良朝貴族の生活圏

句としての「丹生川上神」「八幡神」が考えられてくるのである。

(6) 略称地名が一般に貴族にとって親しい地名に対する表現であるとしても、前稿にも触れておいたように、その逆の表現である場合も非常に少いが含まれている。編集者にとってよくその場所がわからないような地名の場合、註記なしの地名で記されているのである。記紀でいえば「伊寺水門」(仁徳記55年)「竹水門」(景行紀40年)「後方羊蹄」(斉明紀5年)などの場合である。伝承の過程で地名だけというか、音だけというか、その場所が不明になった地名とみられるが、遠隔地の地名に限られるようである。続紀の場合はっきりこの例にあたる地名と断定できるものはみられないが、たとえば宝龜11年、伊治公の反乱にはじまる東北の戦乱の記載に、征東使の奏上を略記したところで「是以遣二千兵 經略鷲座 楯座 石澤 大菅屋 柳澤等五道」(宝龜11・12庚子)と列記した地名がでてくる。これは陸奥および出羽の一連の地名をさすと思われるが、註記なしの地名である。戦況の報告文にもとづく記載で、おそらく遠い東北の細かい地名に対しての理解なしに、単に戦勝報告の例として記載したのであろう。それにしても遠隔地の地名の場合であり、その例も少いので略称の持つ、もうひとつの意味については註にとりあげるに止めた。

(一二七) 一二七

二

さて続日本紀から検出された地名件数は、現在四三六七例を数えている⁽⁷⁾。これを国別の単位でそれぞれの分布数を示すと図1のような結果を得た。

ここに示された地名分布の状況は、大略記紀の場合と同様の傾向を持っていることがわかる。比較のため、記紀で得た国別地名分布を図2・図3⁽⁸⁾として再掲しておこう。同様の意味で国別件数の多いところ、それぞれ便宜的に10位までを順に示すと表1のようである。そして図1や表1から明らかのように、長く都の置かれていた大和国の地域に地名分布が圧倒的に集中し、全体の約4にあたる一〇八一例(四三六七例中)もの分布がみられていることが判明する。続いていわゆる畿内諸国、さらに畿内近隣の、近江、伊勢、紀伊、美濃などの国々に分布が多く、遠く離れたところでは東北そして九州方面ということになる。ところで畿内諸国について、それぞれ三つの史料の間で数値上多少異動のあることが表1に示されているが、畿内全般としてまとめて眺めれば、いずれの場合も多くの数値が、近隣諸国を含めて集中していることがうかがえるのである。記、紀、続紀いずれの場合も地名分布は、圧倒的に畿内中心に集中しているのである。この事実の結果だけからいえば至極当然の結論のようにみえるが、三者に一致している点を地名分布から明らかにしたことは重要であろう。さらにいえば、記紀に示された時代と、続紀に示された時代との年代差、百年たらずの間では、貴族の生活圏に目立った変動が生じていないことをこの事実が示していることになろう。古代国家を動かしていた中心地域は、奈良朝前期と奈良朝時代の間では、その範囲に大きな変化があったと地名分布のほうから読みとれるまで進んでいなかったことになる。

全国の地名分布の状況が、続紀と記紀とでは、大局的見地からすれば変化がないといっても、部分的に眺めてみると時

図1 続日本紀にみられる地名の国別分布数

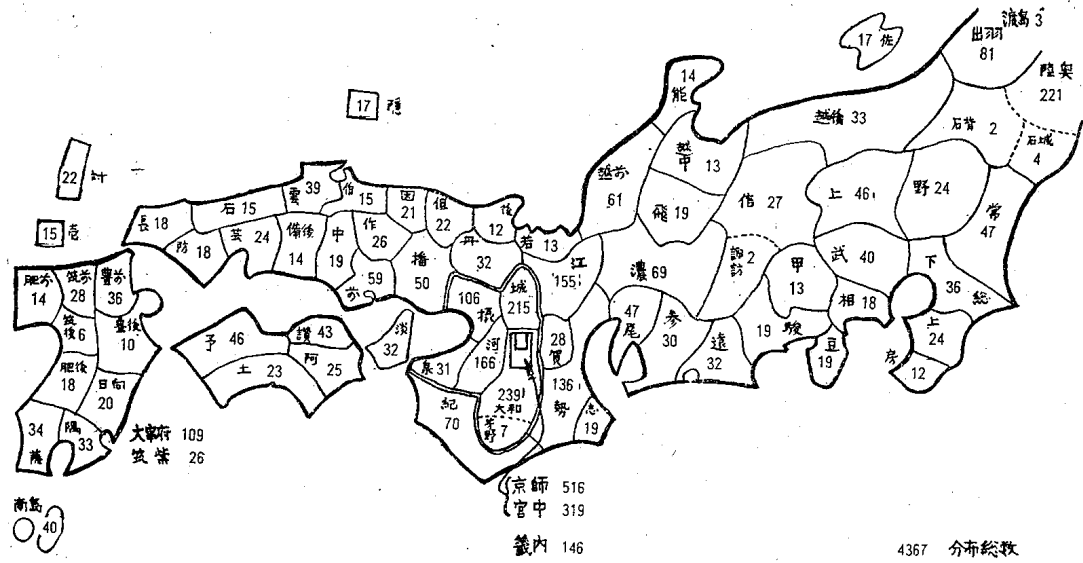


表1 地名分布の多い国々（分布数および割合）

順位	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	備考	
続紀	大和	陸奥	山城	河内	近江	伊勢	大宰府	摂津	出羽	紀伊	以下美濃 越前と続く 全体分布数 4,367	国名
	1,081	221	215	166	155	136	109	106	81	70		分布数
	24.8%	5.1%	4.9%	3.8%	3.5%	3.1%	2.5%	2.4%	1.9%	1.5%	①+...⑩ 53.5%	その割合
紀	大和	筑紫	摂津	河内	近江	伊勢	山城	紀伊	美濃	越	播磨 出雲 と続く 全体分布数 1,898	
	668	149	134	104	63	56	53	36	29	29		
	35.2%	7.8%	7.1%	5.5%	3.3%	3.0%	2.8%	1.9%	1.5%	1.5%	①+...⑩ 69.6%	
記	大和	河内	山城	摂津	近江	伊勢	吉備	出雲	尾張	美濃	越 紀伊と 続く 全体分布数 628	
	212	52	31	30	28	18	18	15	13	12		
	33.8%	8.3%	4.9%	4.8%	4.5%	2.9%	2.9%	2.4%	2.1%	1.9%	①+...⑩ 68.5%	

代の変化を示す数値の変動をともなう箇所もあらわれ、きていことは事実である。続紀で目立ってきているのは陸奥、出羽両国の数値の高まりである。陸奥に二二一例、出羽に八一例の分布があり、続紀で陸奥は大和につづいて第二位、出羽は九位をしめている。書紀の場合では筑紫(北九州)が第二位をしめており、これと匹敵する。東北方面に数値が高まっているのは、北関東諸国の数値の高まりも含めて、ここに改めて断わるまでもなく、奈良朝から平安朝中期の長期にわた

図2 日本書紀にみられる地名の国別分布数

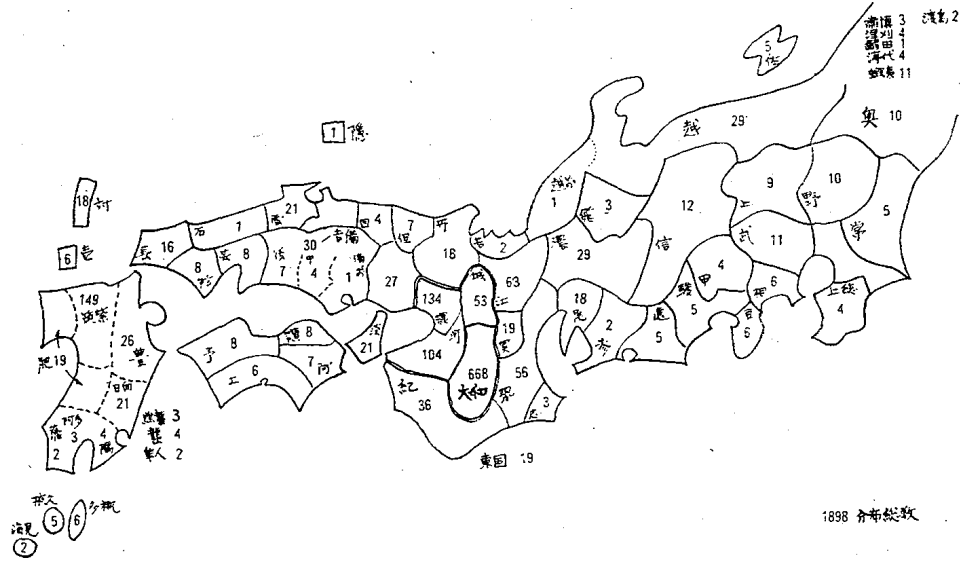
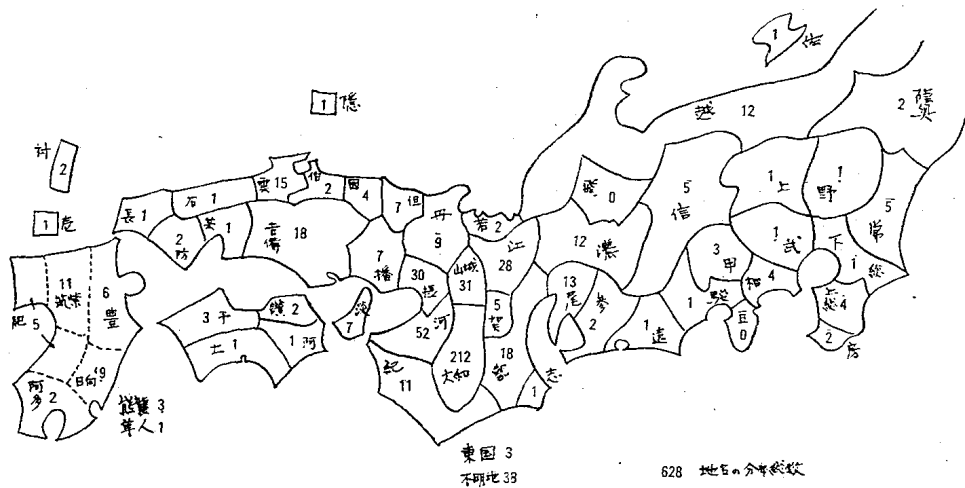


図3 古事記にみられる地名の国別分布数



動きといつか、貴族の活躍地の差異が地名分布の数値のうえにもはっきり示されているといえよう。しかも記紀の時代とちらかといえは、裏日本、越側に東北開発の重点がおかれていたように分布の数値から読みとれるに対し、続紀の時代に

り断続的に展開された、古代国家の東北方面への領域拡大の事業、それにもなって生じた蝦夷征討問題の反映によるものである。一方九州方面で、大宰府を中心に北九州、それに南九州とやや数値の高まりがみられるのは、外交関係によるものの外、広嗣の乱、大仏建立や道鏡にまつわる八幡託宣事件、南九州から薩南諸島の服属開発にともなうものと考えられる。続紀の時代にこれら北と西のはずれの地域に、中央の貴族にとって大いに問題とすべき国家的事件が、つぎつぎと生じたことにほかならない。そのうち東北方面の高い数値は、記紀にそれほど認められなかった点であり、時代による国家の

はいると、表日本、陸奥側を中心にそれが進められていることを数値が示しているようである。奈良朝時代には、少くとも九州に対する貴族の関心とはほぼ同程度のものが、東北方面にも向けられていたことが数値上から判断されると思われるがどうであろうか。

註

(7) 現在までの続紀の地名検索にもとずく。今後の補正により多少の増加が見込まれよう。

(8) 図2に記した書紀に含まれる地名の総数および国別地名分布数は、前稿の発表数にその後の補正を加えたものである。

三

ここで地名分布の示す数値のやや細かい点に立ち入ってみるとしよう。地名分布が集中しているとした畿内諸国および周辺について、全体の分布数に対してしめる割合を、続紀、紀、記それぞれの場合について示すと図4のようである。この図から畿内諸国の分布のしめる割合は、記紀で約50%、続紀で約40%にも達することがわかってくる。続紀では記紀よりやや下廻っているが、いずれにせよ都をとりまく比較的狭い範囲の地域に、地名が集中的に分布していることを数値的に明確にしたといえよう。この地域内のできごとが、それだけ高い率で、記紀、続紀にのせられているということである。記紀、続紀、ともに当時の日本全域にわたって比較的網羅的に記事をのせていることが、それぞれの地名分布の状態から(図1、2、3参照)わかってくるが、それにしても多くの記事が集中している地域と、僅かの記事しかのせない地域とがあり、地名分布の濃淡が非常に明確であったといつてよい。このことはとりもなおさず、都の周辺を生活舞台としていた貴族の支配する国家であったことの特色をよくあらわしており、支配者の関心事項は、地域的に眺めるとき、いわゆる畿内地域に集中していたことを示すにはかならない。

ところで全般的にみて記紀の50%に対して、統紀の場合畿内の地名のしめる割合が40%に下ってきていることはどう考
 えたらいだろうか。わたくしはこの点について以下のように考えている。畿内に中心をおき自己の生活圏内のことに深
 い関心を寄せてきた貴族たちが、古代国家の支配階層として国家の運営にあたるにしたがって、少しづつではあるが畿外
 各地いいかえれば当時の日本全体に対する関心を高めつつあり、地方豪族との接触を通じてそれが具体化しつつあったこ
 との反映とみられないだろうか。前にあげた表1に示された数値にふりかえって、大和を第一とする地名分布の多い国々
 10位までがそれぞれ全体に対してしめる割合をここであげてみると、記紀で約70%にも達しているのに対し(記六八・五
 % 紀六九・六%)、統紀では約55%に止まっていることは(統紀五三・五%)、その他の国々に対する関心が僅かかもし
 れないが上ってきたことを示す証左ではないだろうか。また書紀の場合、遠方の国々で国家的大事件の生じなかった国々
 は、ほとんど一桁の記事しかそれぞれのせられてなかったのに対し、統紀では二桁の数値に上ってきており、さらにその
 数値の比率は書紀の全体の地名件数(一八九八)と統紀の地名件数(四三六七)との比率、約一对二をはるかに上廻る増
 加を示していることになる。とすれば、この辺に記紀と統紀の違いが示され、時代の進展とともに古代国家の実績が上
 りつつあったひとつの証拠となるのではあるまいか。

註

(9) 統紀のなかで畿内の
 地名がしめる割合が最低
 となっているのは第八卷
 (元正 養老2~5)の
 21・9%であり、最高と
 なっているのは第十八卷
 (孝謙 天平勝宝2~4)

卷	A	B	C	%
1	108	32	29.6	6
2	125	39	31.2	2
3	145	56	38.6	5
4	93	34	36.5	8
5	68	22	31.8	4
6	138	35	25.4	1
7	83	25	30.1	9
8	105	23	21.9	8
9	180	41	22.8	3
10	113	67	59.1	3
11	109	59	54.0	3
12	109	49	45.0	0
13	130	36	27.7	7
14	108	63	58.3	3
15	92	56	60.9	9
16	123	68	55.3	3
17	152	84	55.3	3
18	65	41	63.1	1
19	134	70	52.2	2
20	88	39	44.3	3
21	33	9	27.2	2
22	96	22	22.9	9
23	75	29	38.2	2
24	117	30	25.6	6
25	69	17	24.6	6
26	145	61	42.1	5
27	79	32	40.5	7
28	96	41	42.7	8
29	159	41	25.8	3
30	145	73	50.3	3
31	77	33	42.9	5
32	114	53	46.5	5
33	104	38	36.5	5
34	118	56	47.5	5
35	63	23	36.5	0
36	157	48	30.0	3
37	86	51	59.3	0
38	108	68	63.0	7
39	70	33	47.1	1
40	188	48	25.5	9
全	4367	1745	39.9	

付表 各巻に
 日本各
 統紀の
 における畿内
 の地名のしめる割合

の63・1%である。参考のため各巻の場合を付表で示しておく。Aはその巻に出てくる地名総数、Bはそのうち畿内の地名

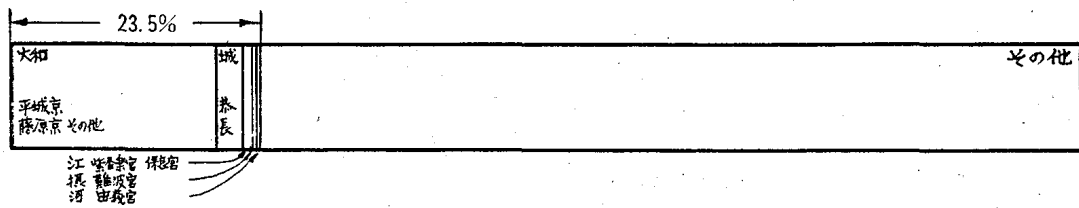
数、Cは畿内地名のしめる割合をそれぞれ示す。

四

一方、続紀の地名分布が一番高い大和国について、そのなかをさらに大きく類別してみると、京師内の地名が大部分をしめていることに気付く。大和国の地名分布、二〇八一例中八三五例、約80%が京内でしめられているのである。この京師内分布の高い数値は大いに注目すべきことと思う。それは当時の国家的関心事項が圧倒的に都のなかで生じた事実に集中し、それを重視していたことを明示する数値といえよう。遠く離れた九州や東北に至るまで、各地に起った記事ののせ、支配地全体のことをなるべく網羅的に記録しようとする努力が続紀にみられ、それが続紀の特色であることはいまのべてきたところであるが、その反面貴族のより強い関心は、この国家を動かしていた都のなかのことに向けられていたことを如実に示しているといえよう。古代国家の政治のありかたを考えればこのようなことは、数値をあげるまでもなく十分予想されることかもしれないが、地名分布の数値のこの片寄りは、その事実をより明確なものにさせるのである。

京師内の地名分布をさらに類別してみると、宮中（大内裏）の場所の名をあげるものも多く含まれていることがわかる。（図1参照）京師内八三五例中三一九例は宮中の場所である。このことは宮中での貴族たちの行動に、さらに大きな関心を寄せていたことが想像されてこよう。さらに、続紀に記事があってもその場所を明らかにしてないものは、その場所が予測されたとしても件数として数えていないとはじめに断ってきたが、宮中あるいは京師内でとりおこなわれたと思われる儀式、饗宴、叙任など、宮廷に関する記事が続紀に非常に多いことを考え合せると、いま出てきた数値以上の強い傾斜が、宮中にひいては都のなかでの事実にあったとみてよからう。

図6 続日本紀にみられる各京の地名のしめる割合



奈良朝貴族の生活圏

このような考えかたは別の面から数値を出してみることにしてもはっきりしてくる。いままでは大和におかれた都の場合に限って数値をみてきたのであるが、続紀には桓武の長岡京をはじめとして、聖武の恭仁京、紫香楽宮、難波京、その他畿内および周辺諸国に一時的に営まれた都での記録が多くのもせられている。そこでこれら各京における記録に示された地名件数を合算して、全体に対ししめる割合をとってみると図6のように約25%にも達することが判明する。⁽¹⁰⁾ 全体の地名件数のうち約4%が各京における地名件数であるということは、続紀の史料として、ひとつの大きな特色を示すとともに、古代国家がいかに都を中心に動いていたか、国家の特色を物語るといえよう。

註

(10) 各京における地名分布数を国別の数値で示せばつぎの通りである。

大和	841
河内	4
摂津	31
山城	107
近江	42
計	1025

五

つぎに続紀の略称地名の分布について眺めるとしよう。略称地名の出てくる国およびその数値を示せば、表2に列記した国々であり、表2の②の欄に示した数値のようである。全国的な分布を知るため図示してみると図7のようになる。これと比較のため、書紀の場合を示せば表3の国々であり、その④欄の数値となり、図8のようでもある。なお⑤の欄の数値は、天武紀から持統紀までの三巻に含まれる略称地名の数値を示している。

いまこれらの表や図をみて明らかになってくることは、続紀といい、書紀の場合といい、略称地名

略称地名が出てくるのは壬申の乱以降の傾向が強いということを示す。略称地名のあらわれかたからも、近江から美濃にかけての地域が、新たに中央に注目され、ようやく親しみの持たれる地域になってきたことが予想されるのである。

図8 日本書紀にみられる略称地名の国別分布数

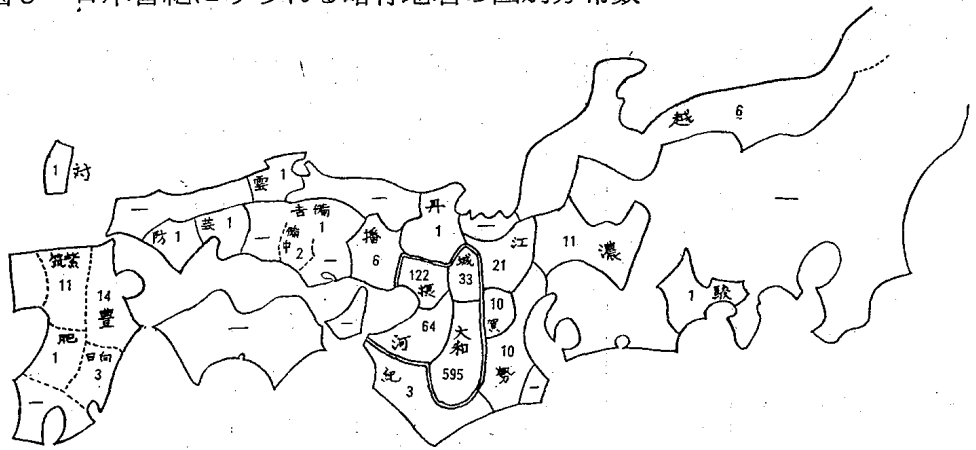


表3 略称地名の出てくる国々およびその数値(日本書紀)

	大和	河内	摂津	山城	近江	伊賀	伊勢	美濃	紀伊	播磨	丹波	越	駿河	吉備
③	668	104	134	53	63	19	56	29	36	27	18	29	5	30
④	595	64	122	33	21	10	10	11	3	6	1	6	1	1
⑤	(216)	(5)	(10)	(6)	(17)	(9)	(7)	(11)	—	—	—	—	—	—

備中	出雲	安芸	周防	筑紫	豊	肥	日向	対馬	国名
4	21	8	8	149	26	19	21	18	地名分布数
2	1	1	1	11	14	1	3	1	うち略称地名数
—	—	—	—	—	—	—	—	—	天武～持統紀にみられる略称地名数

この二国の場合数値は畿内並みに高いが、壬申の乱の反映が考えられ、そのことから内乱後にわかたに貴族の関心の高められた地域と考えられる点が強いとして、都を中心とする一まとまりの生活圏である畿内とは同等に考えないほうがよいとみてきた。いまここにあげた例からそのことを示すとすれば、表3の④の欄にみえる数値によると、書紀の略称地名の分布が畿内諸国に続いて多い地域は、その周辺では近江から伊賀、伊勢、美濃の諸国である。ところがその数値は、これらの諸国の場合に比べて同じ表の⑤の欄の()に示した数値と大変近いことに気付く。⑤に示した数値はこの項のはじめにのべたように、天武紀から持統紀に至る三巻のなかに出てくる略称地名数である。ということとは、これらの国々で

書紀の場合以上のように考えたのであるが、時代が下って続紀の場合はどうか。この間にこれらの地域は貴族の生活圏として畿内と一まとまりになったのであろうか。続紀の地名分布数が畿内周辺諸国のうち、とくに高くなっている近江と伊勢の二国についてここで考えてみよう。いま表4として、畿内諸国および近江、伊勢を含めた周辺諸国の場合について、続紀各巻に出てくる地名分布数を示しておこう。なお()内の数値はそのうち略称地名の分布数である。数値は

以下省略→

丹波	伊勢	伊賀	志摩	紀伊	淡路	播磨
2	5 (1)			1	1	1
1	6	2		8 (3)	1	1
2	8	2		7	1	
	1		1	1		
1	2	3		1		3
4	2	1	2	1		1
	1				1	
4	5	4	3	15 (3)	2	8
	3		3	1		1
1				3	4	1
	1	1				
	13	2				
	3	1				
	1	2	1		1	2
1	4		1	2	1	
	2		1			
1	5 (1)			2		
1	1	1		1		1
2	2					2
	6 (1)	1	1	1	1	1
	2					2
1	3	1			1	1
1	1		1	2	3	3
1	1	1		13 (3)	4	2
2	2		1		1	
	5 (1)		1	2	2	4
	5		1		1	2
1	1	1	1	2		1
	2 (1)				1	
1	4	1	1			1
	7	1	1			
	1			1		1
	2			1	2 (2)	
	14	1				1
	3				2	
2	1	1				
	1					3
3	9	1	1	5	2	7
32	136 (5)	28	19	70 (9)	32 (2)	50

表4 続日本紀各巻における国別地名分布数

奈良朝貴族の生活圏

巻	国名	宮中	京師	大和	河内	和泉	摂津	山城	近江
1		1 (1)	5	16 (15)	4 (2)		1 (1)	2	4
2		9 (9)	1	13 (8)	3 (1)		1	7 (1)	4
3		8 (8)	13	16 (12)	4		6 (4)	1	2
4		7 (6)	9	7 (5)	2		1	5	2
5		2 (2)	3 (1)	5 (1)	5		2	5 (1)	1
6		4 (4)	7 (2)	15 (6)	1		2	5 (4)	3
7		3 (3)	6 (3)	1 (1)	8 (2)	3	3 (1)		4
8		4 (2)	10 (6)	2	3	1			
9		15 (14)	8 (1)	8 (6)		2	3 (3)	2 (1)	6
10		27 (27)	22 (10)	4 (4)	2		1 (1)	3 (2)	1
11		11 (9)	18 (6)	3	4 (1)	5	6 (5)		1
12		14 (11)	16 (6)	3 (1)				1 (1)	
13		13 (13)	7 (4)	2 (2)		2	2 (1)	6 (4)	7 (6)
14		1 (1)	12 (2)	4 (2)	2		6 (4)	32 (30)	7 (3)
15		1	7 (2)	4 (4)	7 (7)	1	12 (12)	21 (20)	17 (17)
16		12 (10)	35 (26)		3 (1)		2 (2)	11 (10)	20 (19)
17		11 (10)	32 (25)	21 (17)	10	1	4 (3)		5 (2)
18		6 (6)	15 (11)	6 (5)	2 (2)		7 (5)	1 (1)	
19		9 (9)	24 (18)	8 (8)	14 (3)		6 (2)	2 (2)	1 (1)
20		14 (13)	19 (13)	3 (1)		1			2
21		5 (5)	4 (1)						
22		11 (9)	8 (3)	1			1 (1)		2 (1)
23		2 (2)	13 (9)	9 (6)	1	1		2	9 (5)
24		8 (8)	9 (5)	3 (2)	4		3 (1)	2	12 (5)
25		5 (5)	3 (2)	2	2 (1)		1	3 (2)	9
26		4 (4)	20 (1)	9 (2)	16 (3)	6	2 (1)	4	4
27		1 (1)	16 (6)	6	3	2	2	1	6
28		6 (6)	18 (11)	3 (2)	5	1	4 (2)	2	2
29		11 (10)	18 (7)	5 (2)	1		4		2
30		8 (7)	22 (12)	5 (1)	29 (14)		4 (4)	1	3
31		9 (9)	10 (7)	9 (9)	2 (2)		1 (1)	2 (1)	
32		10 (9)	18 (7)	11 (6)	5	1	1 (1)	3	2
33		8 (8)	7 (2)	18 (5)	3	1	1	4	1
34		19 (17)	23 (8)	3 (3)	2 (1)		1	4 (2)	
35		10 (10)	9 (5)	2 (2)			1		
36		14 (14)	21 (1)	5 (5)	3	1	1	2 (1)	1
37		9 (8)	22 (2)	8 (5)	4	1	1	1	2
38		4 (4)	5 (1)	5 (4)	4 (1)		10 (4)	36 (27)	3
39				2 (1)	6 (3)		2 (1)	19 (11)	6 (1)
40		3 (2)	1 (1)	2 (2)	2	1	1	25 (13)	4
全巻		319(294)	516(227)	239(155)	166 (44)	31	106 (60)	215(134)	155 (60)

(一三九) 一三九

() の数値はそのうち略称地名の分布数を示す

かりが細かく羅列された表で恐縮であるが、表4を通観してみると、畿内周辺諸国のうち近江、伊勢両国が全体としてまとめた数値が高いというだけでなく、ほとんど毎巻に数値の分布のあることに気付く。それだけ両国に対する貴族の関心あるいは配慮が、他国に較べて常に高かったことをよく示していると思う。近江の場合さらに略称地名の分布数も全体として多いほうである。畿内を別にすれば最高の数値となっている。(表2の②参照)しかし注意してみると、略称地名の出てくる巻に大きな片寄りがあり、畿内諸国の例にみられるように分散的分布となっていない。巻13から16のところと、巻23・24に集まっているのは、それぞれ聖武の東国方面行幸(巻13 天平十二年)同じく紫香楽行幸および新京造営(巻14・16 天平十四年・十七年)そして孝謙上皇と淳仁の保良宮造営(天平宝字五年・六年)にともなうものである。近江は山城国から北東にそれほど高い山を越えずに達せられる国で、奈良時代離宮的な都が一度ならず設けられたところでもあり、貴族が畿外でまず第一に関心を寄せた国とみてよいと思う。しかし略称で地名をあげているのが、前記のように特殊なときのみであるというのは、畿内と近江が貴族にとって同様の親しみを持つ地域とするところまでには至ってないことではなからうか。わたくしは書紀の段階でのべたと同様に、近江は貴族の生活圏の外縁部を構成していたというところで止めておきたいと思う。

伊勢国の地名分布は、近江に続いて畿内周辺としては高いところである。伊勢の地名で注目されるのは何といっても伊勢神宮関係のものであろう。伊勢の一三六例中七二例は神宮関係の明らかなものであり、50%強にあたる。このことは、国家的祭神の性格を強めつつあった伊勢神宮が、都の貴族の注目を常に浴びていたことを示す。一方、神宮関係の地名分布を除いた伊勢国の地名分布数を考えると、紀伊や美濃並みとなるが、この数値はそれ以遠の国々とは違った、畿内周縁諸国としての親近感の度合いを示すと思われる。しかし、伊勢国には伊勢神宮をいま別にすれば、略称で呼ばれる地名がごく少いことを考え合せると、結局伊勢には伊勢神宮が祭られていることによって、貴族たちが深い関心を持ったとして

も、それは神宮関係の土地に対してであり、伊勢国全体が畿内並みの地域として生活圏にくりこまれていたとは思えないのである。伊勢神宮は都と深い関連を持ち、貴族の生活圏の飛地になっていたとしても、伊勢国はまだ神宮を通じて関心の持たれた外縁部とみておいたほうがよさそうである。

註

(11) 畿内周辺からとびはなれた遠方の国で略称地名の分布のや
や多いところとして、豊前(21)筑前(9)出羽(9)が注目
される。ただし豊前の場合そのほとんど全部が八幡神について
であり、註5のところでのべてきたように、八幡神が託宣を通
じて中央との結びつきを特殊に保った結果、遠方の神にもかか
わらず中央によく知られる神となっていたことによると思われる
。筑前の場合はいくつかの例に分れるが、「博多大津」とか
「香椎廟」とか「大野城」「怡土城」など限られた場所について
略称で記されているが、これらいずれも大宰府をとりまくいわ
ば特定の場所であり、遠方ではあるが大宰を通じて中央に知ら

れた地名に限られているとみられる。出羽の場合もやはり同様
に、蝦夷方面に備える特殊な域柵を記す場合、略称で記されてい
るのである。この外の地名例が出羽の場合出ているが、註6で
のべているのでここでは省いて考えてよいと思う。以上三国の
略称地名について眺めてみると、遠方の場合でもやはり貴族た
ちに知られた特殊な場所について、親しい表現とみられる略称
が使われていることが感じられよう。しかしこれらの略称数値
の高まりは、分布がとびはなれていることと、限られた地名の
場合ということから、貴族の生活圏を考える場合別のものとみ
てよかろう。

むすび

続紀にみられる地名の分布というか、続紀の記事の地域性というか、それを数値上から眺めて考えてみたわたくしの以
上の試論を要約するとつぎのようになる。

八世紀はじめのころと八世紀後半との間、百年たらずの時期に、古代国家の官人として生活してきた貴族たちの生活圏
の範囲は、地名分布の数値を中心とした考察からすると、大局的には変化が起っていないことである。奈良朝貴族

は、畿内地域を一まとまりとした生活圏を持ち、その外縁部として近江国や伊勢神宮のある伊勢国の地域が考えられるというところになる。

また続紀の史料としての特色を、地名分布からみた場合、記紀の場合と同様に、畿内地域を中心に記事が集録されていることである。この傾向は編集者たちの意識の問題を別にしても、古代国家の性格の一端をよく示していると思われる深い。

以上の結論からすると、記紀で考えてきたことと続紀の場合とは、結果的には同様ということになりそうである。しかし続紀の段階ではじめて明らかになった点もみられる。それは、続紀では京師内の行動、生活を示す記事が非常に多くの数をしめていることであり、一方畿外の遠方諸国の記事のしめる割合も記紀の場合にくらべて増えてきたことである。この事実は一見矛盾することのように感じるが、都を中心に生活していた貴族の支配する古代国家の、安定したさまを物語るものと考え次第である。

記紀から地名を拾い出してカードに記入する作業からはじめたこの研究は、ようやく近ごろ続紀の段階まで進んできた。この先に続く六国史についても今後同じ努力を続けたいと思っている。いま続紀で得た地名カードを中心に、記紀のそれと比較しながら、わたくしの考えの一端をのべてきたところであるが、ながながとのべてきたにしては出てきた結論は至って平凡にすぎたようである。畿内についてこれまでいろいろいわれてきているが、わたくしは地名という指標をもとに、その分布数という数値的なものを背景として、比較的明確な裏付けにもとずいて畿内に対するひとつの発言ができればと思っていささか努力し、その間で考えられたことの二三をのべたまでである。

69年10月15日

(本稿は42年度慶應義塾学事振興資金助成にもとづく研究の一部である)